

## 老後の生きがい

佐貫 亦男

航空評論家

〔本田さんのテレビ〕

このあいだテレビで、本田宗一郎さんの伝記放送があった。私は期するところがあって待った。そもそも本田さんを表現することは至難のわざで、俳優さんには気の毒だが、できればは最低であった。よく似ていたのは藤沢武夫さんだけである。

ただし、私が待ちかまえていたのはこのことではない。本田さんが羽田へ帰ってきたとき、これだよといって示すプラスねじだ。本田さんはこれをドイツの工場でひろってもどり、ホンダの工場で生産したことになっている。これは絶対に嘘だ。私は本田さんと全旅程を同行したが、そんな事実はなかったし、本田さんはコソコソやる人ではない。

考えてみても、ちゃんとライセンスが必要なプラスねじ生産をホンダがだまってやるはずがない。それにプラスねじはもう日本で生産していた。このマンガ的演出は、昔の日本人技術者がドイツの火薬工場で靴の裏に付着した粉を分析して模倣した伝説の下手な蒸し返しにすぎぬ。

私はこれから、この話が出るたびに、ウソだ、ウソだ、といい続けるつもりである。なんだか、定刻になると窓から顔を出して鳴くカッコ時計の動作に似ている。そのうち、おや、カッコが鳴きませんね、とのぞくと、カッコは落ちて両足を天井に向けていた、なんて結末は不吉だから想像しない。

〔ナチスドイツの記憶〕

ナチスの時代を生きる、そんなテーマが新聞のどこかに載っていた。私は自分でなんとも思っていない第2次世界大戦中ドイツに約3年間滞在した事実が、受けとりかたによっては興味をそそる可能性があると感じた。

たとえば、街の隅々まで及んでいるナチス親衛隊の情報網である。国民はその網の目において、ひっそりと暮らしていたらうと、当時の

日本人は想像していた。ところが、私の経験ではそんなことがなかった。しかも私は、空襲中に下宿の部屋の洗面器水道コックを閉め忘れて、下の弁護士、しかも秘密親衛隊員の部屋を水浸しにした。

これは私が実習中の工場幹部に頼み、壁職人を入れて修理する約束をした。ところが、それが実行されないうちに下宿は被爆して、全部灰になった。私は赤い笑いを押さえきれなかった。なにもかも、もうおしまいだぞと。

私は親衛隊のブラックリストには記載されていなかったらしい。小者すぎた。それでも、意識して反ナチ行動にでも参加したら、追及は絶対に激しかったにちがいない。



日本人でナチス強制収容所へ入れられた人間はゼロだったらしく、大島大使はこれを誇りにしていたにちがいない。私たちが在独日本人は、強制収容所の存在は知っていたが、戦後初めて知ったような無惨なものとは全然知らなかった。親衛隊の監視はこんなところで厳格を極めた。強制収容所の話をただで収容所ゆきだから、日本人などへ漏らすドイツ人はいなかったであろう。

とにかく、こんな環境でドイツに住んだ。これは本田さんのテレビとちがう意味で私の財宝である。こんどは別にウソだと叫ぶ必要はないが、へへえ、知っていますよ、と腹の中で笑っているだけだ。

こんな経験を持つことが私の老後の生きがいである。

イラスト・市川興一